

ミュージアム・アイズ

MUSEUM

EYES

Vol.54
2010

Mm
MEIJI UNIVERSITY
MUSEUM

特集

時田昌瑞

ことわざコレクション



- 博物館ニュース
- 展示&リサーチ
- 市民レクチャー
- 学芸研究室から
- 収蔵室から
- M2カタログ
- 入館者数の動き・団体見学の記録・図書室から
- 博物館友の会から

来館者30万人達成!!

企画展 瀬戸赤津焼—伝統的工芸品の経営とマーケティング—

八ヶ岳を中心とする中部山岳地の縄文時代中期文化の繁栄を探る
—縄文時代植物質食料の研究—

日本列島に定着した最初の人類

—旧石器時代における黒曜石利用のはじまり—

前場幸治コレクション

新グッズ堂々完成!

資料整理ボランティア

茨城県玉里舟塚古墳埴輪整理作業に参加して

明治大学博物館

時田昌瑞 ことわざコレクション

ことわざ研究の第一人者であり「江戸いろはかるた」の解説などでもおなじみの時田昌瑞さんから、長年にわたって収集されてきた関係資料のコレクションをご寄贈いただきました。明治大学では山口政信法学部教授を代表者とする研究ユニットが組織され、時田さんも客員研究員として参画されていたことなどから、貴重なコレクションが明治大学に収蔵されることになりました。和装本・文献類は明治大学図書館へ、かるたと一枚ものの印刷物、器物類は博物館に収蔵され、博物館に収蔵された資料は約1,500点にのびります。今後、関係の先生方との連携の中で、これらの資料が活用されてゆくこととなりますが、整理作業の成果を踏まえここにその一端をご紹介します。



江戸系いろはかるた（江戸後期）

江戸系いろはかるた（明治期）

かるた

コレクションの中でも最も大きな比重を占めるのが「かるた」です。「犬も歩けば棒にあたる」でおなじみの「江戸系いろはかるた」をはじめ、一口にかるたといってもその実態は様々です。「上方系いろはかるた」「新案系」「混交形」「戦後」「現代」「郷土」「学習」「文芸・芸術系」「キャラクター」といった分類項目を設けて整理しました。年代は江戸時代後期から現代まで、小さいものは親指の先ほどの大きさのものから、札状に切断する前の大判の印刷物の状態のものもあります。オーソドックスな犬棒いろはかるたから、近年のアニメキャラクターを題材としたもの、また、かるたは教育の場面でも積極的に活用される傾向があり、特に戦前、戦時下のものはその時代の空気を色濃く反映しています。このように内容は実に多彩で、札の素材やパッケージデザインの変化など、我が国におけるかるた文化を俯瞰する上で格好の資料群と言えます。また、かるたをモチーフとした様々な製品やデザインも参考資料として揃っています。



刀の鏝「蠅螂が斧」（江戸期）

明治大学ことわざ学研究所

法学部の山口政信教授が研究代表者となり、森洋子名誉教授（元理工学部）、林雅彦教授（法学部）、穴田義孝教授（政経学部）といった明治大学の教員を主要メンバーとして組織されている研究ユニットです。時田昌瑞さんも客員研究員として参画されています。同ユニットでは下記のような研究課題を掲げています（明治大学ホームページから）。

庶民の暮らしの中で、ことわざが重要な役割をはたしていること、また、それゆえに、ことわざの本格的な研究が必要なことは、大西祝、藤井乙彦、柳田國男らによって指摘されてきた。

しかし、ことわざ研究は、民俗学や言語学などの片隅での副次的な課題とされ、市井の好事家の営為にとどまりがちであった。ことわざ学研究所においては、ことわざを学際的・総合的に研究することを課題とし、ことわざ学を新たな学問領域として確立することをめざし、基礎的な研究から着手する。

印刷物

ことわざ関連資料の多くを占めるのは、江戸時代から明治初期にかけての「錦絵」、木版印刷による「刷物」、そして近代以降の様々な印刷物、となります。縁起物に通ずる「ことわざ」をデザインした刷物、ことわざを用いて役者や歴史上の人物の批評を記した刷物など興味深い資料がたくさんあります。なお、書冊の体裁をとるものは明治大学図書館の所蔵となりました。



ことわざによる役者評論（江戸後期）



教訓いろはたとえ（ことわざ尽し絵・明治期）

芸術作品

「絵画」と「工芸品」に分かれます。「一富士、二鷹、三茄子」をはじめ、「縁起のよさ」にかかわる「ことわざ」があることから、それをモチーフとする絵画が多く描かれました。工芸品も同様です。特に刀装具や根付の細かな意匠は、遊び心として江戸時代人の飄逸で洒落なセンスを感じさせます。



柄鏡「波に千鳥」（江戸期以前）

玩具類

双六の升目に記される短いフレーズでまとめられた言葉の中に「ことわざ」を見出すことができます。また、メンコや凧など、玩具のデザインのモチーフとしてことわざに関わる様々なものがあります。



凧「兎波を走る」（昭和期）

生活資料・現代商品

陶磁器や染色のデザインとして多くの「ことわざ」が取り入れられています。装飾調度から商業看板まで、さまざまなケースでことわざが使われてきました。現在、我々の身の回りにある商品の中にもことわざが活用され、日本人の生活の中におけることわざの存在感をあらためて感じます。



鉄製壁掛け「ひょうたんから駒」（戦後）



染付磁器「一富士、二鷹、三茄子」（明治期）

時田昌瑞コレクションお披露目展開催！

こ・と・わ・ざ ワールドへようこそ — 時田昌瑞ことわざコレクションのすべて —

■主催：明治大学図書館・明治大学博物館・明治大学ことわざ学研究所

■会期：2010年5月28日（金）～7月19日（月）

足掛け3年にわたって整理作業がおこなわれた貴重なコレクションの全容を一般公開します。江戸時代から現代に至るまであらゆる時代とジャンルにわたる「かるた」、ことわざ関係の和装本、ことわざをモチーフとした錦絵、刷物、工芸品や生活資料を一堂にご覧いただけます。

来館者30万人達成！！

去る2009年9月9日、明治大学博物館は2004年4月のリニューアルオープンの日から数えて30万人のお客様をお迎えしました。記念すべき30万人目となられたのは、新濃健さんです。

来館25万人に達したのは一昨年の12月。その後もたくさんのお客様にお越しいただき、非常に早いペースで30万人を達成することができました。

これまでにご来館いただいた皆様、誠にありがとうございました。これからもより多くのお客様に訪れていただけるよう努めてまいります。



博物館館長より新濃さん（右）への記念品贈呈の様子

特別展「大名と領地—お殿様のお引っ越し—」閉幕

昨秋、10月17日（土）から12月20日（日）までの65日間にわたって開催された2009年度秋季特別展は、最終的に合計5,292名の来場者を迎えて無事閉幕しました。今回の展示は、2005年以來の譜代大名内藤家文書を素材とする展覧会でした。会期中の10月28日には内藤家当主久邦氏・恵子氏ご夫妻が来校され、納谷学長と懇談の後、展示を観覧されました。来訪にあたって、家伝の馬具（障泥＝あおり）をご寄贈いただきました。

内藤家文書4万5千点は館蔵資料の中でもひととき存在感のある史料群ですが、今回は譜代大名の国替に関わる史料についての研究活動の中間報告という形で企画されました。幕府への役職就任などを契機に譜代大名は思いのほか多くの国替を経験しています。しかし、国替自体に関わる史料の伝来は少なく、これまであまり実態の明らかでなかったその一端が、内藤家文書研究によって詳らかになったわけです。また、展示の目玉となった延岡城下図屏風は、地方の城下町を描いた図屏風として、これまた稀少な公開の機会となりました。展覧会の追体験には、是非、展示図録を。ミュージアムショップで販売中（¥1,000）です。



東京都立白鷗高等学校附属中学校の職場体験を実施

2009年11月10日から12日まで、職場体験として東京都立白鷗高等学校附属中学校2年生10名を受け入れました。初日に展示や施設などの説明を受けた後、博物館で実施している入門講座の聴講や、他館に貸し出した考古資料の返却作業への立会い、図書室の配架整理のほか、企画展の受付、発掘調査で出土した埴輪の洗浄や復元作業など、博物館の学芸員が日頃従事している仕事の一端を体験しました。また、3日間かけて博物館を紹介するポスターを各自でデザインして制作し、作品は11月から1月にかけて博物館入口で掲示されました。参加された方々は、次のとおりです。秋葉脩悟さん・阿部稜平さん・石岡司さん・遠藤美幸さん・岡戸修造さん・桑形悠人さん・佐藤伸樹さん・冨塚亮彦さん・内藤正美さん・山田夏帆さん（50音順）。



岡戸修造さんが制作した博物館のポスター

常設展示「商品」展示の一部リニューアル

昨年5月、特別展「東アジア・海のシルクロードと“福建”」展の閉幕後、常設展示室の「商品」コーナーを復元する際、壁ケースの東側半分を用いて陶磁器の展示がリニューアルされたのにお気づきでしょうか？

新博物館開館当初以来の展示は、伝統的工芸品の種目ごとにその基本的な知識一すなわち、原材料標本と製造工程を紹介してきました。これは、言うなれば商品としての伝統的工芸品を論ずる上で必要な予備知識ではあるものの、“製品としてのあり方”であり、最終的な目標である“商品としてのあり方”を提示するまでに至っていないというジレンマがありました。限られた展示スペースを利用しているが故にいたし方のないことでしたが、この機会に「陶磁器」については多めのスペースを使用し、商品としての伝統陶磁器のあり方をご覧いただくことにしたわけです。そこで、遅まきではありますが、展示の趣旨と見所をここでご紹介したいと思います。



まず、陶磁器は「いつから」商品として流通したのか？ **商品としての陶磁史**は、“商品の生産”という観点から我が国の陶磁史を捉え直し、その歩みを概観しています。記念館前遺跡出土の古陶磁も活用してみました。つづいて、「どこで」生産されているのか？ **代表的な産地**の紹介です。「何から」できているのか？ 一口に陶磁器と言っても素地原料によって3つのタイプに分かれます。**陶磁器の種別**では“焼き物”という名称で一括りにされがちな陶磁器の種別を提示しています。では、「どのような」プロセスを経て完成品となるのか？ 赤津焼・織部角筋皿による**陶器の製造工程**では、焼成すると酸化銅の施釉部分が緑色に発色し、長石釉は透けて下絵が鮮やかに浮き出るのが分かります。**磁器の製造工程**は有田焼の染付井鉢。陶器に較べて焼き締まりが強いことが、施釉工程と完成品の大きさの違いから分かります。**上絵付の工程**は低火度で多様な色を焼き付ける技法。素地はすでに本焼成を終えて完成品になっていること、また、緑色部分は焼成前にはグレーなのが分かります。その最下部には、各工程の段階ごとにより詳細に技法を紹介しています。**成形技法、絵付、施釉、焼成技法**については炎の違いによって発色が変わる**酸化焼成と還元焼成**について解説しています。



ここまでは、これまでの展示コンセプトの延長線上ですが、以下は、産地における調査研究に基づく「商品開発」をテーマとしています。**器種構成**は、今日、商品開発の動向が大きく変わる以前の在来の器種を紹介しています。これらはむしろ今でも伝統陶磁器の一般的なあり方としてイメージされている感がありますが、実際には、近年あまり製造されなくなった器種もあります。そして、**現代の商品開発**として、バブル経済崩壊の後、1990年代以降における長期的な低落傾向の中、消費者の関心を惹きつけるべく考案された開発コンセプトを紹介しています。現在、最も売れている伝統工芸の製品は、我々が通常使用する陶磁製品一般ともまたイメージが異なるはずですが、産地における新しい動向は、近年の「伝統的工芸品の経営とマーケティング」プロジェクトにおける調査・研究の成果を反映しています。今後は流通の問題なども図表化して提示してゆきたいと考えています。

「伝統的工芸品の経営とマーケティング」プロジェクト

常設展示を構成する3つのコーナーの内、商品部門は、1951年に開設された商学部商品研究所の資料室(後、商品陳列館として一般公開)を前身としています。現在では、伝統的な手工業製品(伝統的工芸品)を主な収集・展示の対象としていますが、陶磁器や漆器などの工芸品を、商学部ゆかりの博物館らしく、工業製品として、商品としての視点から取り上げるという、他に類例のないユニークな活動を展開しています。

アカデミーコモン新博物館の開館後、商品部門の調査研究体制の再構築を目指して発足したのが「伝統的工芸品の経営とマーケティング」プロジェクトです。商学部・大学院商学研究科の教員・院生と連携したプロジェクトでは、2006年の発足以来、商品開発や流通・販売に関わる店頭調査、産地の実態調査、製造・販売関係者を招いての公開特別講義の開催、各種マーケティング調査などを実施して来ました。伝統的工芸品産業は、近年の衰退傾向を否定できませんが、文化的な付加価値をとまなう商品として、一般的に空洞化が指摘される我が国工業製品の将来像を描く格好の素材とも考えられます。

企画展 瀬戸赤津焼 —伝統的工芸品の経営とマーケティング—

上原 義子 (明治大学商学部専任助手)

2009年8月から9月にかけて開催されたこの展覧会は、博物館と明治大学商学部・同大学院商学研究科が連携して推進している「伝統的工芸品の経営とマーケティング」プロジェクトの成果報告展だった。同プロジェクトは、伝統的工芸品へのアプローチとして、縦軸に博物館の視点を、横軸に商学の視点を据えたもので、明治大学ならではのユニークな取り組みである。

数ある伝統的工芸品の中からケースを選択するにあたっては、学生にとって比較的身近なジャンルである陶磁器を取り上げた。陶器に関しては赤津焼(愛知県)、次いで磁器に関して有田焼(佐賀県)を取り上げている。有田焼は日本を代表する磁器であり、その知名

度は非常に高い。一方の赤津焼は、日本最古の陶器産地の系譜を自負し、尾張徳川家の御庭焼であったという歴史を持つ。プロジェクトでは、これらの製作や販売に携わる方々に対してヒアリングや現地調査を実施してきたが、そうした活動の中から、ブランド戦略と産地情報の意義が注目ポイントとして浮上してきた。ここではその問題に触れてみたい。

製品には基本的な機能となる部分と、付加的な機能を持つ部分がある。例えば、漆器の汁椀は味噌汁や吸い物を注いで飲むための機能が基本であり、器に施された豪華な蒔絵が持つ機能は付加的なものである。競争が激しい市場においては、付加的な層でいかに製品の差別化を行うかが重要となる^{i) ii)}。このことは、要すれば「付加価値の創造」

と言えるであろうが、競争市場における持続的優位性を保つために必要不可欠なことだ。

この付加価値の一つがブランドである。ブランドは、初めは単なる名前やシンボルに過ぎないが、消費者にブランド知識を植えつけることによって「差別化」「象徴」「省略」「保証」「想起」という顧客価値を提供するようになる。そして企業はその対価として、「ロイヤリティ」「価格プレミアム」「流通上の優位性」「プロモーション上の優位性」「ライセンス・その他」「持続的優位性」「資産価値」などを享受する^{iii) iv)}。有田焼は知名度が高く、比較的高级磁器として認識されており、さらに「深川製磁」や「源右衛門窯」といった有田に本拠を置くメーカーの個別ブランドが多くある。こうした点に、有田焼のブラン



展示風景



ド戦略が一定の成果を収めていることが見いだせる。

一方の赤津焼であるが、先述のように、豊かな付加価値に恵まれているものの、現在では販路は狭く、知名度も低迷しており、ブランド力という点では有田焼に大きく水をあけられている。筆者が行った都内百貨店での赤津焼販売の実態調査では^{v)}、赤津焼を取り扱う店を見つけれなかった。かわりに、「織部」「黄瀬戸」「志野」「美濃焼」という名称であれば大抵の店でみることができた。もともと織部や黄瀬戸は赤津焼の主力商品であり、陶器の中でも先行して都内百貨店で取り扱われていたが、考古学上の知見から現在では美濃焼と認識されるようになった経緯がある。こうしたことも赤津焼の低迷の理由の一つに考えられよう^{vi)}。

美濃焼と混同されがちな赤津焼であるが、赤津焼というのは愛知県瀬戸市の赤津地区において作られる陶器を指す。この地区は、瀬戸市において中世以来伝統陶器を焼き続け、美濃との陶工の往来もあったという歴史などから、この産地の持つ個性を強みとして“赤津焼の”織部、黄瀬戸、として知名度向上やブランド力強化が図れるであろう。この動向は作り手の現場では既に見られる^{v)}。

こうした方向性は、マーケティングの学術的関心領域であるカントリー・オブ・オリジン (Country-of-Origin ; 以下 COO とする) という視点から検討できる^{vi)}。COO とは、端的には「商品の原産地に係る情報が消費者に与える影響」に焦点を当てた研究領域だ。商品の産地情報を得た消費者は、その産地に抱

くイメージを通して商品自体のイメージまでも影響を受けることがある。例えば、食品については、昨今の毒ギョーザ事件や残留農薬野菜の問題、産地偽装問題などを背景に、産地情報に注意が払われるようになった。具体的に人々がどう感じるかは商品の種類、国の経済レベル、消費者の特性などの諸前提によって変わるので状況に応じた判断が必要だが、COO の視点を取り入れることで、産地情報が商品そのものに及ぼす影響を付加価値として活用できよう。

産地の魅力を消費者に訴求する動きは、百貨店の主要催事である物産展や都道府県のアンテナショップが身近な例である。近年記憶に新しいところでは、宮崎県が知事を筆頭に「宮崎県」という産地情報を用いて地場産業を盛りたてようとしている。こうした意識の高まりに鑑みて、伝統的工芸品もまた、「日本の地場産業」ならではの特性を差別的優位性として消費者に訴えることが重要である。たとえば、筆者が以前に行った伝統的陶磁器のブランドと産地情報が消費者に及ぼす影響を調べた研究では^{vii)}、ブランドと実際の産地が消費者の連想と合致していればポジティブな捉え方がなされ、逆に連想からあまりにかけ離れる場合にはむしろ開示されていない方がポジティブに捉えられるという結果が示されている。我々は産地情報へのこうした視点を、戦略的に取り込んでいくことが重要だろう。

以上が、プロジェクトを通して見えてきた伝統的工芸品の経営とマーケティングに関わる問題関心の一端である。

伝統的陶磁器というと、その美術的・意匠的側面が目目されがちだが、商品として、工業製品としても生き残りをかけて暗中模索する様子もまた伝統的陶磁器の一面だ。そしてその様子は、今日の経営やマーケティング研究に対しても実り多き視点を与えてくれる。

- i) Levitt, T. (1980), "Marketing Success through Differentiation-of Anything," Harvard Business Review, January-February, pp.83-91.
- ii) Kotler, P. (2002), Marketing Management, Prentice Hall. 邦訳 恩蔵直人, 月谷真紀『コトラーのマーケティング・マネジメント』ピアソン・エデュケーション, 2002
- iii) Aaker, D.A. (1991), Managing Brand Equity, Free Press, 邦訳, D. アーカー (1994), 陶山計介他『ブランド・エクイティ戦略』ダイヤモンド社
- iv) Keller, K.L. (1998), Strategy brand management: building, measuring and managing brand equity, Prentice Hall. 邦訳 K. ケラー (2000), 『戦略的ブランド・マネジメント』恩蔵直人, 亀井昭宏 訳, 東急エージェンシー.
- v) 上原義子, 梅村晴峰ほか「伝統的陶器の販売戦略—赤津焼(愛知県)を事例に—」『研究報告』第13号, 明治大学博物館, 2008, pp, 27-45.
- vi) 上原義子「陶磁器の販売方法に関する探索的研究—ブランディング, COO, 商品分類の視点から—」『研究報告』第14号, 明治大学博物館, 2009, pp, 1-12.
- vii) 上原義子「陶磁器の生産国情報に関する研究」『日本経営診断学会論集』第9号 日本経営診断学会, 2010, pp, 164-171.



「研究報告」誌上に報告された成果の紹介展示



産地組合理事長(当時)梅村晴峰氏を招いて開催された特別講義

八ヶ岳を中心とする中部山岳地の 縄文時代中期文化の繁栄を探る

—縄文時代植物質食料の研究—

会田 進 (長野県考古学会会長)

縄文時代研究における中期農耕論

縄文時代植物質食料の研究背景にある長野県諏訪湖周辺から八ヶ岳山麓における縄文時代中期文化の繁栄については、特別史跡尖石遺跡の宮坂英弑氏の調査など先人の業績がよく知られている。とりわけ藤森栄一氏の縄文中期農耕論の提唱は、関東地方中心の研究から地域研究へ、そして、仮説として繁栄した中期文化の背景を探る研究をより一層深める方向に導いていく結果になったことにおいて、高く評価する意見が多い。

日本の農耕の起源は、稲作の始まる弥生時代とする考え方で大方の研究者が一致している。縄文時代については、パン状炭化物の発見以降、クッキー状炭化物、シソ属種子塊（アワ状炭化物）の発見、土器胎土中のプラント・オパー

ル（イネ科植物特有の珪酸塊、葉っぱなどの細胞内にある）の検出があったものの、狩猟・漁労・採集経済社会という定説を見直すまでには至っていない。

種子圧痕（図1・5）というのは、弥生時代の稲作研究の端緒となった宮城県柞形圓貝塚出土弥生土器の初圧痕で知られるように、土器に残される様々な痕跡の一つで、土器製作時についた指紋、補修痕、そして粘土にまぎれた虫あるいは入れたかもしれない種実の圧痕などが研究対象となって古い。しかし、これまでの肉眼、レンズ観察にはおのずと限界があり、一部に同定の誤認があったこともやむをえないことであるが、近年の走査型電子顕微鏡を用いたレプリカの観察は、エゴマやアズキ・ダイズ類似のマメが見つかり、縄文時代の生業について再び議論が活発化している。

レプリカ法による土器の種子圧痕観察

レプリカ法とは、土器の胎土（器壁・

器表裏面）に見られる種子の圧痕（図1・2・5）にシリコン樹脂を注入して取り出し、繊細なレプリカを作ることにより、様々な角度から顕微鏡観察を可能とした研究方法である。粘土には想像以上に微細な、例えば種子や虫のひげや表皮の模様などが写しとられていて、その映像は神秘的世界である。これは明治大学考古学専攻OB 丑野毅氏（東京国際大学教授）の功績が大きく、今回の研究活動に当たっても氏の実地指導を得ていることを記しておく（図4のレプリカ）。

こうした研究活動は九州地域の山崎純男氏（福岡市教育委員会）や小畑弘己氏（熊本大学文学部准教授）、また、山梨県では長沢宏昌氏（元山梨県埋蔵文化財センター）、中山誠二氏（山梨県立博物館）によって、そして長野県では今回の研究分担者である中沢道彦氏（長野県佐久地方事務所）によって、種子圧痕の研究が進められ、最近では前述の通り、栽培種大のマメ類の検出

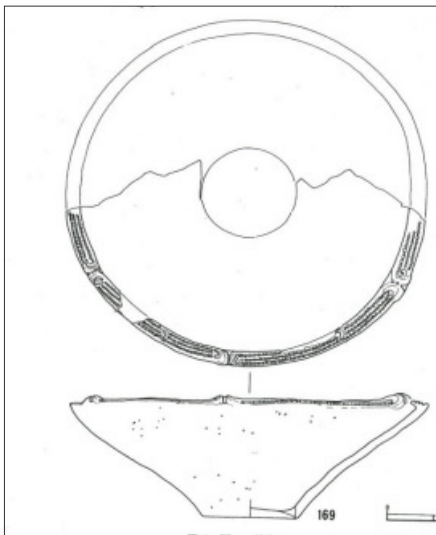


図1 復原された土器に観察された種子圧痕（岡谷市梨久保遺跡出土）エゴマほどの大きさの圧痕（図中の小さなドット）が器内外面に無数見られる。レプリカを採って精査中。縄文時代中期後半、高さ14.4cm



図2 整理中に割れた土器の器壁の中に発見された種子圧痕（岡谷市志平遺跡出土）手前破片の左端のくぼみとその上の底部破片の両方に半分ずつのこる。縄文時代中期後半、志平遺跡出土

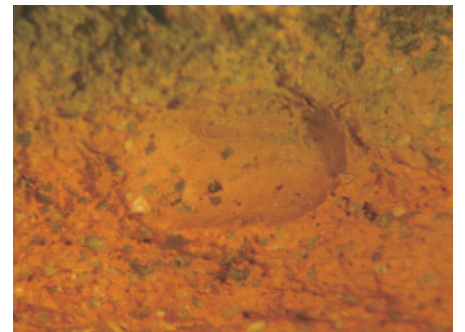


図3 図2の拡大写真

が相次ぎ、新たな議論が展開している。紙面の都合上詳しい引用は省略させていただくが、それら先学の研究に呼応して、長野県の縄文時代中期遺跡の種子圧痕の抽出とそれを裏付ける炭化種子の検出、そして種の同定が今回の研究テーマの一つである。

研究内容と今年度の作業

1974年の長野県諏訪市荒神山遺跡の縄文中期「アワ状炭化物」の出土は、中期農耕文化の物的証拠が出土したとして大きな話題を呼んだ。結果的にこれはシソ属（エゴマ）と結論が出され、これにより中期農耕論は泡と消えたかのように言われているのであるが、しかしそうであろうか。シソ属でも栽培種とされるエゴマが検出されたことで、新たな縄文時代の栽培植物の議論が始まり、この前後から地域の研究者は、炭化物の洗い出しや、土器の種子圧痕の検出を行っていた点を重視しなくてはなるまい。ただ、この当時に抽出された資料が未整理状態で、その同定などの分析作業も本研究の一つである。

長野県岡谷市においても、1985年の中期を代表する梨久保遺跡の調査、報告にあたり、炭化物の検出や種子圧痕の残る土器片の拾い出しを行っていた。都合により分析・同定にはいたらなかったが、その数は、炭化種子塊1点、種子圧痕のある土器破片80点にのぼる。現在進行中の復原済時の精査においても、新たに種子圧痕と思われる痕跡が顕著に見られる土器が10固体以上にの

ぼり、種子圧痕の在り方において、土器の形態上の傾向が見出されるのではないかと期待している。

今回は、これらを中心に、早期から後期にわたる岡谷市内の遺跡を中心に周辺市町村の遺跡も含め、種子圧痕のレプリカの作成と種の同定、梨久保遺跡、目切遺跡の炭化種子の走査電子顕微鏡観察と種の同定を行う。

今年度は一部の肉眼鑑定を研究指導者の那須浩郎氏（総合研究大学院大学研究員）、研究分担者である佐々木由香氏（(株)パレオ・ラボ）が行い、炭化物のフローテーションでは研究指導者の百原新氏（千葉大学大学院助教授）の指導を受けて行った。また、走査電顕写真は小畑弘己氏、仙波靖子氏（熊本大学埋蔵文化財調査室）から提供いただいている（図4）。

研究の目的：縄文時代食生活、主に植物質食料の復原

一連の活動の端緒は、ドングリ食の実験から始まった。1966年当時、岡谷東高校の教諭をされていた当研究メンバーの一人河西清光氏によって、諏訪地域の女子高校クラブ活動ではドングリ灰汁抜き実験とクッキーづくりが行われていた。それは今回の研究母体である岡谷市土師の会（会長山田武文氏、前会長興石甫氏）に引き継がれ、今日まで、縄文食実験の一つとして精力的に進められている。河西氏の研究は古く、今から80年前のドングリを発見したことにある。それは長野県安曇村番所（現松本市）の民家に蓄えられてい

た救荒食糧のドングリ（これはいまだに食することが可能）である。土間の竈の上の天井から、カマスに入れられ釣り下げられていたという（図6、1965年長野県考古学会誌3号に関連報告が掲載されている）。

縄文時代の主食は堅果類、つまりドングリ（クリも含む）といわれているが、どのように調理して食したか、民俗例など参考に始まり、これまで継続している実験成果は、考古学のデータを理解する上で有益である。クッキー状炭化物から動物性の脂肪分が検出されたと聞くと、イノシシの油や肉を加えて肉団子、これは「ハンバーグ」風。エゴマの存在が濃厚となるや、エゴマと蜂蜜のたれをつけてドングリ団子、これは「エゴマのおはぎ」風。そしてマメや様々な野草が入れば、これは「お焼き」風という具合に。

種子圧痕や炭化種子の精査は、縄文人の食卓復原をより明確にしてくれることは間違いないであろう。しかし、縄文時代のこれらエゴマやマメは野生種か栽培種かどうか、栽培したのなら農耕社会といえるのかどうか議論は山積する。まだ、それらに迫る資料の蓄積がない今は、確実な種子類の事例を積み重ねていく段階であると考えている。

なお、本共同研究は、2009年度明治大学大久保忠和考古学振興基金にもとづき実施されている。この機会に、私ども共同研究の目指す目的などについて、ご理解をいただければ幸いです。

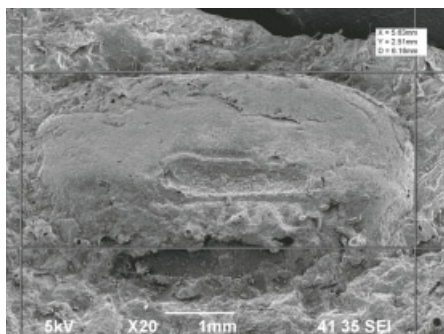


図4 図3のレプリカの走査電子顕微鏡写真 マメ類似のヘソが良く見える



図5 種子圧痕の例（岡谷市梨久保遺跡出土）左端のくぼみのレプリカを見るとヘソがわかる



図6 80年前のドングリ 一度煮て虫を殺し、かますなどに入れて竈の上に吊り下げられていた

日本列島に定着した最初の人類

—旧石器時代における黒曜石利用のはじまり—

島田 和高 (考古部門学芸員)

はじめに

2000年11月に発覚した「前・中期旧石器時代遺跡捏造事件」は、今年で10年目の節目を迎える。昨年9月、出雲地方の砂原で12万年前に遡るといふ遺跡が発見されたとの報道があったものの、詳細な発掘の情報は広く公開されておらず、石器とされる出土品もいまだ十分な数の専門家が見てすらもないという状況である⁽¹⁾。日本列島にいつ、誰が、どのようにして到達し、そして定着していったのか、そのプロセスの考古学的な復元はいまだ不確定であると言わざるを得ない。確かに、九州地方を中心として、2000年以降にも新たに幾つかの「中期旧石器時代」（ここでは、約4万年前以前の時代としておく）と主張される遺跡の報告例がある。しかし、それらの遺跡をもとに日本列島の旧石器時代を中期旧石器・後期旧石器と時代区分して研究を進めている研究者は少数である。ここではその問題に深入りはしないが、4万年前よりも新しい後期旧石器時代の遺跡に比べると、資料が断片的、ヒトの営みとしては微かで、誰もが積極的に認めるところまでは証拠が蓄積されていないから、ということになるだろうか。次の10年に確かな発見を期待する声もある。しかし、次の10年でも確かな手応えはつかめないかもしれない。

1. 黒曜石利用のはじまり

そうした意味での「最初の手応え」は、関東ローム層のうち最も新しい立川ローム（東京都付近で約3mの堆積がある）の最下底部から見つかった（図1）。

年代は、38,000年前（14C年代を較正した場合）と見積もられている⁽²⁾。遺跡は関東平野の各台地はもとより関東平野北部や静岡の愛鷹山麓とよばれる地域でも見つかった。こうした中部地方の南半部とともに九州地方の南半部でも同様の年代からはっきりと遺跡が残されていることが確認されている。他の地域ではまだ不確かである。概ね東京都に位置する武蔵野台地では、2006年の集計でこの時期に58個所の遺跡が見つかった⁽³⁾。立川ロームの下に位置する武蔵野ロームからは1個所も見つかっていない。2008年までの日本旧石器学会と全国の研究者による集計では、これ以降10,431個所の後期旧石器時代遺跡（関東平野の集計がまだなので確実に増える）が日本列島で確認されているという（あるいは幾つかの4万年前以前と主張される遺跡が含まれるかもしれない⁽⁴⁾）。

ところで、黒曜石は、関東地方の周辺で最も近いのが伊豆・箱根、遠方に位置するのが信州霧ヶ峰・八ヶ岳、栃木県高原山（どこから測るかによるが概ね100km超）、そして海の彼方（伊豆半島の先端から現在の海岸線で約50km）にあるのが神津島というように、特定の場所でしか産出しない火山岩。現在、「最初の手応え」である武蔵野台地上記した後期旧石器時代遺跡のうち9遺跡から黒曜石でつくられた石器が見つかった。同様に静岡県愛鷹山麓や関東平野から信州に至る途上にある長野県佐久市でも黒曜石製石器が見つかった。しかし、かねがね使う量

は僅かで、むしろ遺跡の近くで採れる石材を専ら石器原料としている。

2. どうやって見つけたのか

蛍光X線分析法という黒曜石の原産地を判別する理科学的な手法がある。先の武蔵野台地の9遺跡のうち、まだ十分な分析例とは言えないが、幾つかの黒曜石製石器の産地分析が行われていて、信州産、高原山産の黒曜石と判別されている。また、愛鷹山麓の遺跡では、一つの遺跡で信州産の黒曜石と神津島産の黒曜石が一緒に見ついている例もある。原産地そのものには、まだ確実に同じ時期の遺跡は見つかっていないが、現在の海拔で1,200m～2,000m（氷河時代はもっと高い）にある信州原産地および海によって隔てられた神津島原産地にヒトが到達していたことは間違いない。

黒曜石を見出した黒曜石利用のパイオニア達は、どのように山岳地や海洋にある原産地を発見したのだろうか。理屈をいえば、最初の発見者は山の上や海の向こうに黒曜石があるとは知らないはずである。これを説明する次のようなシナリオはいかがだろうか。土地の事情を知らない「最初の手応え」を残したヒトビトは、まず石器の原料を探さなくてはならない。と言うよりもむしろ、石器原料を含めて、動物の移動経路や利用できる植物などなど、自分たちの生存を確保するために自然資源を網羅的に探索し、発見したはずである。その延長線上で、山岳地や海洋の黒曜石原産地を偶然発見したと考えることができる。黒曜石は確かに切

武蔵野台地における
立川ローム層の堆積模式図

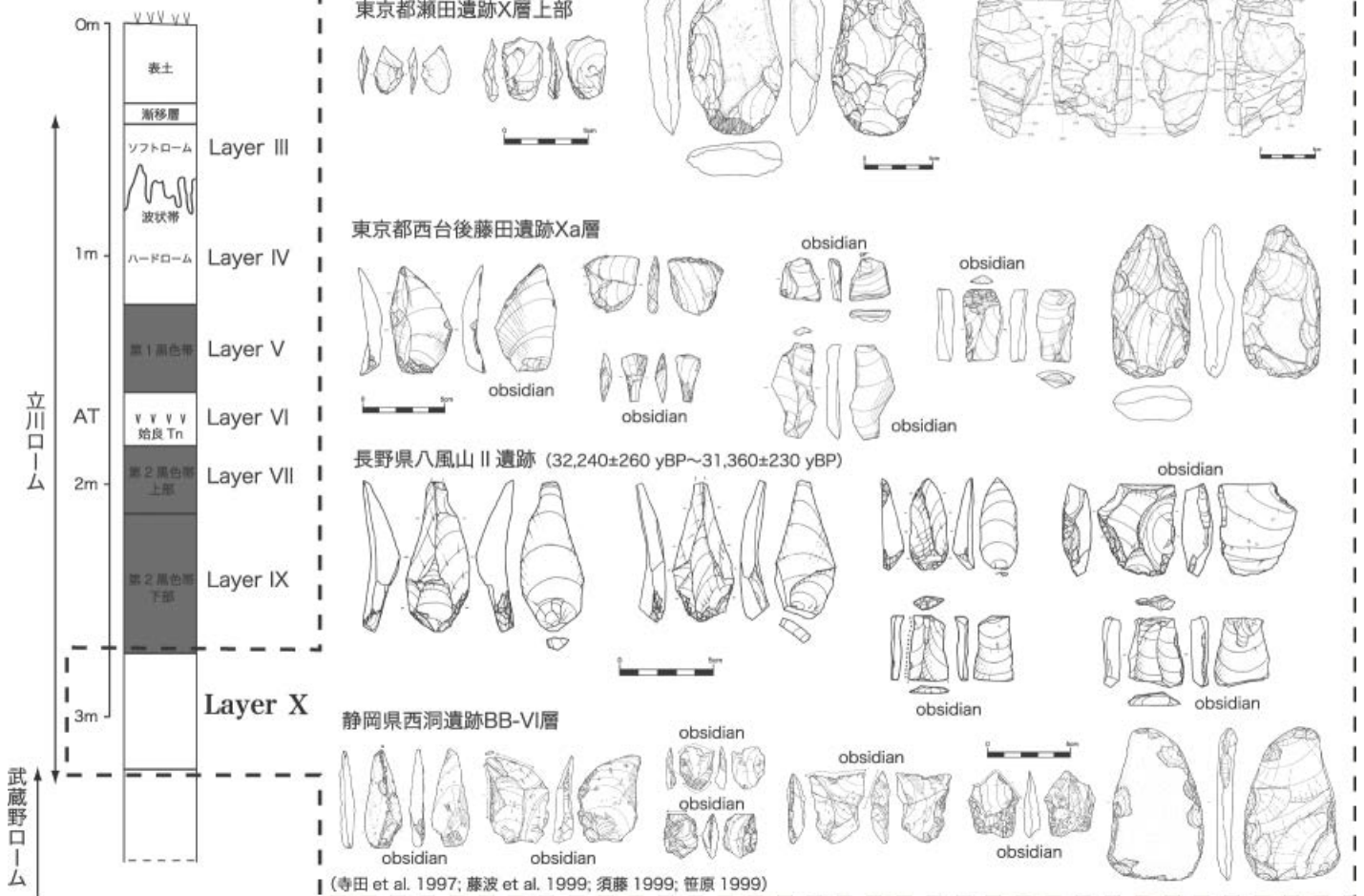


図1 「最初の手応え」の後期旧石器時代石器群と黒曜石製石器

れ味鋭いのだけれども、最初、僅かにしか使われていないのは、石器原料というよりも「こんなものがあつたよ」という意味の環境情報の一つとして持ち帰られたからではないだろうか。

3. 黒曜石利用のパイオニア達は誰か？

ここで重要なのは、最初に関東平野に現れたヒトビトが、高山での活動や海洋渡航を行う十分な知識と技術を持っていたことが示唆される点である。直接的な証拠に難はあるが、海産資源を利用していた可能性すらある。そして、「最初の手応え」に続く次の考古学的な時期になると（おおよそ30,000年～35,000年前）、地域によっては黒曜石を組織だって獲得してムラで分配したり、あるいは多方面の黒曜石が広域に流通する仕組みが整う。黒曜石をめぐるヒトビトの動きと社会はかなり高度であり、彼らは後期旧石器時代一般に認められるホモ・サピエンスに固有の能力を有していたと評価できる。何故そうしたことを気にするかというと、黒曜石利用のパイオニア達が、関東平野

をはじめ日本列島で（中期旧石器を認めるならば「最初の到達者」ではないが）「最初に定着に成功したヒトビト」の一部であった可能性が高いからである。つまり、黒曜石発見のシナリオが正しければ、少なくとも中部日本一帯は無人の地であった可能性が高く、こうした地に進出し定着したヒトビトは、遥かアフリカに端を発するホモ・サピエンス（行動的現代人）による拡散の波（アフリカ単一起源説、イヴ仮説等と呼ばれる）の最前線を代表していたと考えることができるからである。ただし、形質的に現代人かどうかは人骨が発見されない限り証明はできない（この場合、解剖学的現代人という）。一方、中国では拡散してきた現代人による先行人類の交替はなく、ホモ・サピエンスまで連続して進化するという説もある⁽⁵⁾。正直どちらが正しいか、まだ分からない。

いずれにしても、日本列島各地に残された最初の「確かな手応え」を示す遺跡と文化は、まだ十分に研究されて

いるとは言えず、意見の相違もある。今少し、研究の進展をまって仮説の肉付けをしていくことにしたい。

以上は、科学研究費補助金基盤研究(C)による研究成果および2008年度特別展「氷河時代の山をひらき、海をわたる—日本列島人類文化のパイオニア期—」の内容をもとにした。

- (1) 稲田孝司「マスコミ考古学の虚実」『考古学研究』56-3、考古学研究会、pp.17-21. 2009.
- (2) 工藤雄一郎「40-50kaの石器群の年代と古環境」『日本列島の旧石器時代遺跡』日本旧石器学会、pp.51-54. 2008.
- (3) 伊藤 健「多摩蘭坂・武蔵国分寺跡関連・武蔵台遺跡の石器群」『岩宿時代はどこまで遡れるか』岩宿博物館、pp.40-50. 2006; 中村真理「武蔵野台地中央部の後期旧石器時代初頭の石器群」『同前』、pp.51-60. 2006.
- (4) 大竹憲昭「日本列島における旧石器時代遺跡数」『日本列島の旧石器時代遺跡数』日本旧石器学会、pp.32-35. 2008.
- (5) Xinzhi Wu. On the origin of modern humans in China. *Quaternary International* 117, pp. 131-140. 2004.

2010年2月、瓦研究者として知られる前場幸治(ぜんば・ゆきじ)氏から、明治大学に古代の瓦を中心とする考古資料約5400点と、関連書籍約1100冊にのぼる膨大な資料が寄贈されました。前場工務店代表取締役で親子三代にわたる大工・棟梁でもある前場氏は、本業にかかわる著書や国内屈指の大工道具のコレクションを厚木市船子の前場資料館で公開するとともに、瓦資料の収集を約40年にわたって行い、研究者としても著名です。日本全国の国分寺の瓦をはじめ、文字が記された記銘瓦や中国・朝鮮の瓦、また中近世・近代の瓦や瓦道具までも含まれた総合的なコレクションは、日本の瓦史が凝縮されていると言っても過言ではありません。また、研究の成果である『古瓦を追って―相模国分寺、千代台廃寺考―』や『国分寺古瓦拓本集第1巻相模篇』などの著書は、瓦研究の重要な基礎資料として知られています。今回は、そのコレクションの一部をご紹介します。

1. コレクションの概要

今回寄贈された前場氏のコレクションは、①国内の古代の瓦②国内の中世～近現代の瓦③アジアの瓦(古代～現代)④現代の瓦製作の道具及び屋根材⑤その他の考古資料(縄文～近世)⑥典籍・絵画⑦関連書籍、と多岐に渡ります。なかでも中核をなす瓦は、飛鳥時代から現代までのものが揃い、さらに朝鮮半島の古代・中世の資料も含まれ、国内でも有数の個人コレクションとして知られています。資料がもつ情報は膨大で、今後の瓦研究の進展に大きく寄与することが期待されます。このたび、この貴重なコレクションの明治大学での保管と研究を希望され、一括でご寄贈いただくことになりました。

2. 貴重な古代瓦の数々

まず特筆されるのは、文字が残る記銘瓦です。なかでも、2008年に判明した小田原市千代台廃寺の「大伴五十戸」記銘軒丸瓦は、律令で規定された古代の地方行政単位である国・郡・里のうち、里に相当する「サト」の表記である「五十戸」の文字が記されており、古代の瓦生産が「サト」の単位で行われていたことを示す資料です。現在、こうした「五十戸」の文字が残る瓦は本例を含め全国で他にわずか2例しか確認されていません。このほか、今年で遷都1300年を迎える平城京の軒丸瓦や、聖武天皇が東大寺を建立した時期のもので天平文化を代表する東大寺軒丸瓦、大宰府系鬼瓦など中央の寺院や官衙の資料があります。さらに、国分寺の瓦資料は前場氏が全国を回って収集したもので、質量ともに充実した内容を誇ります。特に小田原市千代台廃寺の瓦は前場氏が精力的に収集したもので、千代台廃寺研究の基礎資料となっています。

3. 秀吉と「金箔瓦」

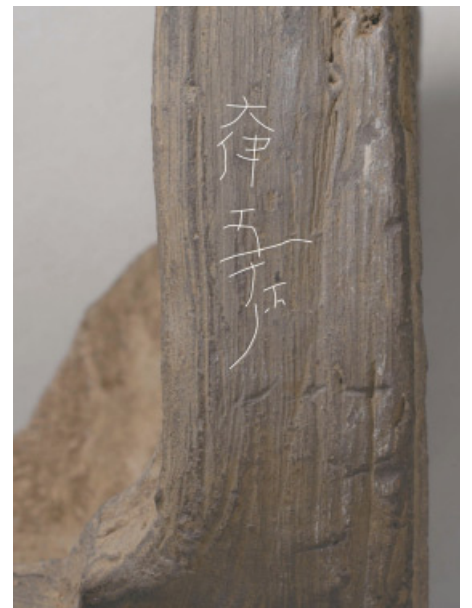
中世の瓦で注目されるのが、五三桐文軒丸瓦(伝大坂城出土)です。織豊期、豊臣秀吉は大坂城・伏見城・聚楽第をはじめとする居城のほか、関東の徳川家康の周辺に配置した親しい大名に金箔を施した瓦を使用させ、自らの勢力圏を誇示しました。本例は、その中心とも言える大坂城のもので、瓦当文様がほぼ完全な形で残っており、当時の政治史の一端を示す資料です。このほか、伝伏見城出土の巴文軒丸瓦も、一部ながら明瞭に金箔が残存しています。政治史という点では、小田原一夜城の一括資料も重要です。秀吉の小田原攻めに際し、一夜にして出現し北条方の戦意を失わせたと言われる一夜



1. 前場幸治氏近影
建築や大工の伝統、技能に関する著書も多い



2. 「大伴五十戸」の文字が記された軒丸瓦(千代台廃寺、古代)
「大伴五十戸」の文字が残る(写真は文字部分を白く加工しています) 山路直充撮影



城ですが、重厚なつくりの瓦からは、通常の城と同じく時間と労力を十分にかけて建設された様子がうかがえます。

4. 造形美の世界・鬼瓦

江戸時代になると、火災の延焼を防ぐため瓦が町家に広く普及しましたが、その棟端を飾ったのが鬼瓦でした。鬼瓦は職人の手作りであり、50cmを超える大型のものや立体的な大黒天など精緻な表現のものは、技術的にも、また美術的にもまさしく職人の技術の粋です。近世・近代の瓦は葺き替えのために廃棄されるケースが多く、省みられることが少ないものですが、迫力ある鬼の表情や躍動感のある波の表現などは、芸術品としても高い価値をもつものと言えます。

5. 瓦以外の資料

瓦以外にも、様々な資料が寄贈されました。縄文時代では、石棒・土偶・石斧・石皿・早期の深鉢形土器等、弥生時代では愛知県安城市出土の手焙(てあぶり)形土器・中広形銅矛、古墳時代では鉄製馬具・須恵器各種(厚木市天神谷戸横穴墓群出土、伝埼玉県將軍山古墳付近出土)、古代・中世では板碑・五輪塔・灰釉の四耳壺(しじこ)などがあります。また、実際に西郷隆盛と会ったことがある服部英龍によって描かれた「故参

議兼陸軍大將近衛都督西郷隆盛南洲翁兎狩図」(明治18年)も貴重な資料です。

弥生時代の中広形銅矛は、一般に北部九州を中心に集落での祭祀に用いられたと考えられており、中四国・北部九州を中心に50例あまりが知られています。本例は残存長73cmをはかり、破断面からは鑄造時に使用した中子の一部が残されているのが確認できます。

資料が相当数にのぼるため、内容や点数の最終的な確認を行う整理作業には数年を要しますが、代表的な資料について2010年に2回に分けて公開します。瓦以外の資料については「新収蔵資料展 2010」の一部として、また瓦については企画展「前場幸治瓦コレクション」として速報展を行いますので、この機会に貴重な資料の数々をぜひご覧下さい。(忽那敬三・山路直充)



3. 五三桐文軒丸瓦 (伝大坂城、織豊期)
表面に金箔が残る。赤褐色の部分は赤漆が塗られており金箔がはがれた後でも美しさを保つよう工夫されている



4. 大黒天の鬼瓦 (和歌山県、近世)
土蔵に置かれたもので、眉や小物、俵などの表現は、精緻かつ立体的



5. 中広形銅矛 (出土地不明、弥生時代)

◆瓦以外のコレクションを速報展示◆

明治大学博物館 新収蔵資料展2010

■期 間：2010年3月3日(水)～4月25日(日)

■主 催：明治大学博物館
入場無料

■主 催：明治大学博物館 特別展示室

主な展示予定資料：土偶・石棒(縄文時代) 中広形銅矛・手焙形土器(弥生時代)、須恵器長頸壺(古墳時代)、板碑・灰釉四耳壺(中世)

◆主要な瓦コレクションを速報公開◆

前場幸治瓦コレクション

■期 間：2010年7月30日(金)～9月12日(日)

■主 催：明治大学古代学研究所・明治大学博物館
入場無料

■主 催：明治大学博物館 特別展示室

主な展示予定資料：「大伴五十戸」記銘軒丸瓦・東大寺創建期の瓦(古代)、五三桐文軒丸瓦(伝大坂城、中世)、金沢文庫鬼瓦(近世)、鬼龍子(中国、19世紀)

※展示の内容・会期等は変更される場合がありますので、博物館に事前にご確認下さい。

新グッズ 堂々 完成！

ポストカード

「大塚初重 3分スケッチシリーズ」 全4種 各90円

明治大学名誉教授大塚初重先生が古墳を中心に描いたスケッチを、淡い色調でポストカードに仕上げました。「宮崎県南方古墳群天下支群」、「長野市大室古墳群整備前の244号墳(将軍塚)」、「長野市大室古墳群大石支群 221号墳 合掌形石室」、「瀬戸内児島ホテルより 小豆島方面」の全4種類。大塚先生が携わってきた調査現場の空気を感じられます。



クリアファイル (刑事・考古)

各100円

この一枚に刑事部門・考古部門の展示を集約しました。シンプルなデザインのなかにさりげない主張を秘めたクリアファイル。刑事はゴールド、考古はブロンズの箔押し加工で仕上げました。何気ない日常を個人的に演出してくれます。たまった書類もスッキリ！透明タイプなので、中身もよく見えて、とても便利です。
※写真は使用例。実物は透明です。



3way ボールペン (刑事・考古)

各150円

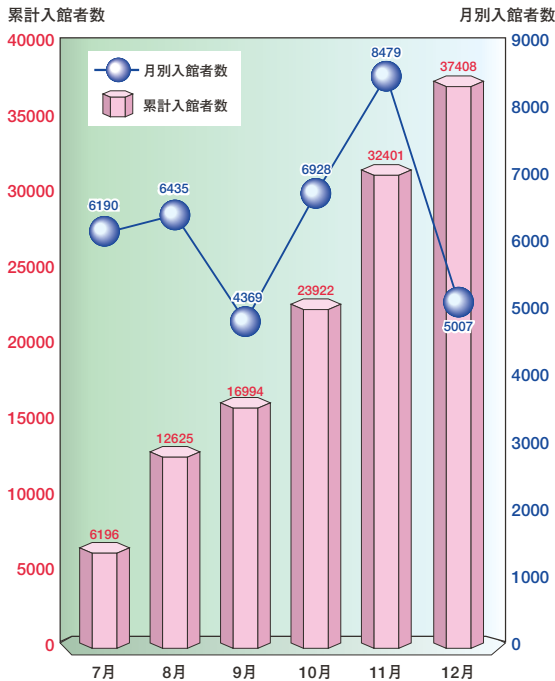
博物館所蔵品のなかでも、特に人気の高いアイアンメイデンと遮光器土偶をモチーフに、黒ボールペン、赤ボールペン、シャープペンシルの3種類がひとつになった便利な一本。刑事はクリア、考古はブルーと2つのタイプをご用意しました。学校に、会社に、ご家庭に、様々なシーンで活躍すること間違いなし！実用的で、ちょっとしたプレゼントにも最適です。



これまで、M2 カタログでは当館の個性豊かな収蔵品の数々を生かしたグッズを紹介してまいりました。新発売のミュージアムグッズも、他の博物館とは一味も二味も違う仕上がりとなりました。価格もお求めやすくなっておりますので、来館の記念にひとついかがでしょうか。ぜひ一度、お手にとってご覧下さい。

明治大学博物館入館者数の動き (2009年7月～12月：延べ人数)

2004年4月以降の総入館者数累計 324,499人



特別展来場者数内訳		開催日数	来場者数
7/1～8/9	江戸の罪と罰『徳川幕府刑事図譜』の世界	40日間	2539
8/21～9/16	瀬戸赤津焼—伝統的工芸品の経営とマーケティング—	27日間	1507
10/17～12/20	大名と領地～お殿様のお引っ越し～	65日間	5296



「大名と領地～お殿様のお引っ越し～」展 内覧会

7月～12月	延べ人数
図書室利用者	2271
講座受講者	1678
黒耀石研究センター利用者数	2287

団体見学の記録 2009年7月～12月

- 【一般】** 栃木県立宇都宮中央女子高等学校 PTA (60名)・江戸東京再発見コンソーシアム (64名)・鳩ヶ谷歴史散歩の会 (30名)・所沢市高令者大学第29期生同期会 (60名)・埼玉栄高等学校 社会科 (12名)・窪田地区振興会 (18名)・明治大学付属明治高等学校・中学校 PTA (100名)・小平市中央公民館 (60名)・栃木県立佐野女子高等学校 PTA (59名)・埼玉県立越谷南高等学校 PTA (60名)・商319会 (15名)・いきがひ大学蕨学園 10期史跡クラブ (20名)・明治大学石川県父母会 (15名)・考古18年の会 (20名)・日本図書館情報学会 (5名)・おなが歩こう会 (45名)・明治大学広報課 (10名)・上三川町教育委員会 (30名)・川崎市盲人図書館 (36名)・上海市建平中学校副校長一行 (5名)・生きがい大学フリークラブ (15名)・忠北大学博物館友の会 (22名)・明治大学国際連携事務局 (35名)
- 【小・中学校】** 神奈川県横須賀市立夏島小学校 6年生 (14名)・聖徳大学附属中学校 3年生 (72名)・東京都江戸川区立小岩第五中学校 2年生 (12名)・桐朋女子中学校 (50名)・山形県新庄市立萩野中学校 2年生 (5名)・明治学院中学校 (53名)・岡山県立倉敷天城中学校 (33名)・大分大学教育福祉科学部附属中学校 (4名)
- 【高等学校】** 茨城県立水戸桜ノ牧高等学校 2年生 (46名)・神奈川県立住吉高等学校 3年生 (32名)・神奈川県立園高等学校 (7名)・広島県立豊田高等学校 (5名)・群馬県立太田東高等学校 1年生 (40名)・東京都立六本木高等学校 (9名)・北海道網走南ヶ丘高等学校 2年生 (45名)・文華女子高等学校 1年生 (32名)・明治大学付属中野高等学校 (190名)・茨城県立鉾田第一高等学校 1年生 (40名)・茨城県立藤代高等学校 2年生 (45名)・広島県呉市立呉高等学校 2年生 (21名)・富山県立八尾高等学校 2年生 (40名)・石川県小松市立高等学校 2年生 (40名)・明治大学付属明治高等学校 (140名)・埼玉県立坂戸西高等学校 1年生 (27名)・茨城県立中央高等学校 2年生 (40名)・御殿場西高等学校 2年生 (38名)・東京都立大崎高等学校 1年生 (45名)・茨城県立多賀高等学校 1年生 (42名)・東京都立鷺宮高等学校 (70名)
- 【大学・大学院・専門学校】** 帝京大学法学部法律学科 1年17組 (15名)・明治大学商学部大沢ゼミナール (20名)・東京デザイナー学院 プロダクトデザイン科 (20名)・ノートルダム清心女子大学 社会教育課題 夏季研修 (15名)・神戸学院大学 佐藤ゼミ (17名)・茨城大学刑法ゼミナール (18名)・ISSスクエア法制倫理分科会 (12名)・駒澤大学博物館学講座 (20名)・東京女子大学 博物館実習 (30名)・明治大学経営学部 公共マーケティング論受講生 (60名)



博物館併設の図書室に関することを紹介する“図書室から”第二弾。今回は OPAC 検索についてご案内します。



資料のデータベース入力が終わりました。2010年4月から新着資料以外は全て OPAC 検索が可能になりました。資料は日本十進分類法 (NDC) に基づいて請求記号順に配架されています。請求記号の頭文字ごとに分類されています。

博物館一般資料：数字
博物館発掘調査報告書：H
博物館図録：Z
博物館目録：R
博物館雑誌：P

H215.2
TAKAY
M

〈例〉発掘調査報告書
H：博物館発掘
215.2：都道府県番号
(215.2は長野県)
JINYA：遺跡名の頭文字
(TAKAYは鷹山遺跡群)
M：博物館所蔵の記号

資料の請求記号がわかったら、
分類→請求記号 (→発掘なら2段目は遺跡名の頭文字5字でアルファベット順)
→巻・号の順で探してみてください。

資料整理ボランティア 茨城県玉里舟塚古墳埴輪整理作業に参加して

一昨年、博物館事務室前の掲示板に資料整理ボランティアの募集が張り出されました。まもなく10人弱の人が集まり、2009年1月から毎週火曜日、午後1時より4時迄の作業が始まったのです。

作業内容は埴輪の破片の「洗浄」→「注記」→「接合」→「復元」という手順で行われました。それはまるでジグソーパズルに取り組んでいる様でした。作業を進める中で、うまく接合できず、やめたいと思ひ悩む場面もありました。しかし、反対に小さな破片と破片が接合できた時は、「ヤッター」と喜びをかみしめたことも何度もあり、今思うと一喜一憂の連続でした。

ここで学んだことは腰をすえ、粘り強く継続すること、観察力を養うこと(埴輪の種類・胎土・焼成・技法)、あせらず努力すること、等々でした。



やっと昨年末に埴輪の復元の形が見えてくると、今までとは違う喜びがひしひしと感じられるようになって

きました。本格的復元作業の始まりです。しかしながら霞ヶ浦を代表する有力首長の墓から出土した6条突帯をもつ大型埴輪が、そうたやすく復元できるはずがありません。

それでも、“継続は力なり”をモットーにして頑張ってきました。時には悩み、あせり、又途中でこれを製作した工人達に思いを馳せ、楽しみながら、資料整理ができたことはとても良い経験でした。感謝しています。

あとは、秋の特別展にむけて努力していくつもりです。
(住田美和子)

博物館 友の会から

【明治大学博物館友の会 連絡先】

〒101-8301 東京都千代田区神田駿河台1-1
明治大学博物館 友の会宛

メールアドレス meihakutomonokai@yahoo.co.jp

※博物館事務室に、友の会の担当者は常駐しておりません。連絡は必ずハガキまたはメールをお願いします。

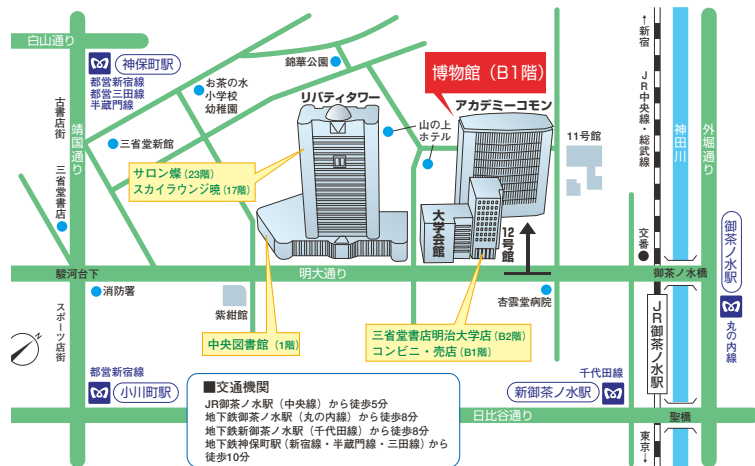
博物館案内

【博物館案内】

- ◆開館時間
10:00～17:00 (入館16:30まで)
- ◆休館日
夏期休業日(8/10～8/16)
冬期休業日(12/26～1/7)
8月の土・日に臨時休館があります。
※開館時間・休館日には変更場合があります。
- ◆観覧料
常設展無料。
特別展は有料の場合があります。

【図書室ご利用案内】

- ◆開室時間
月～土 10:00～16:30
- ◆閉室日
日曜・祝日・大学が定める休日
※図書室はどなたでもご利用いただけます。
※蔵書は原則閲覧・コピーのみとなりますのでご了承ください。



編集後記:2009年の秋季特別展「お殿様のお引越し」展が好評を得て、無事終了いたしました。今回のミュージアム・アイズは商品部門で新たに寄贈を受けた、ことわざについての「時田コレクション」、そして考古部門で新たに寄贈を受けた瓦についての「前場幸治コレクション」を取り上げました。また、ミュージアムショップの新グッズであるポストカード、クリアファイル、ボールペンの紹介をしております。